連載38 在宅医療奮闘記

平成7年より在宅を開始した私の思い出

（医）東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義（63歳・内科）

孝行息子とその“お母さん”施設入所の日

2年前のある日、高齢者施設長さんから在宅かかりつけ医の依頼がありました。某病院主治医からの紹介状によると、その方は認知症・高血圧症・変形性脊髄症・糖尿病等々の疾患を抱える91歳の要介護認定患者さんでした。

依頼のあった施設を訪問してみると、患者さんの息子さんが優しく穏やかに迎え入れてくれました。居室に入るとご本人はベッドに横たわっており、息子さんの奥さまが窓の外を眺めていました。

私はいつものように「はじめまして、これからお体のことを色々お世話させていただきますね。今後ともよろしくお願いします。何でもおっしゃってくださいね」と患者さんに話しかけました。これは、患者さんの認知力・判断力・性格などを知るための最初の診療行為でもあるのです。すると、患者さんは「私の体はどこも悪くないからね。いつもご飯をおいしくいただいてるし、自分のことは自分でできるしね。息子が将来必要になるかもしれんから見学に行ってみようと言うから来たんよ。もうすぐ帰るから・・・」とおっしゃいました。そこで私は「施設見学は泊まってみないとわからないこともありますから、数日間お泊まりになってみてはいかがですか？」と体験入所をすすめてみました。「先生がそう言うんなら泊まってみようか・・・」と決心してくださったので、みんなでほっとした次第です。

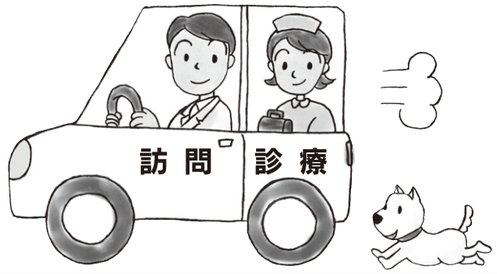
相談室で息子さんから聞いた話によりますと、お母さんは、昔、やり手だったようで家業の事務をしていて、息子さんの奥さまも仲良くその仕事を手伝っていたのだそうです。一年前ほどから認知症により暴言・暴力行為がみられ、生活協力への抵抗もあり現在は独居状態になってしまい、周囲の人たちも心配していたようです。さらに、お母さんと奥さまとはそのころから会話することが無くなってしまったとのことでした。また、息子さんとの話の中で、偶然にも私は息子さんの仕事で以前お世話になったことがわかり、何かご縁のようなものを感じました。

20年間の私の在宅医療経験から、直感でこの患者さんは素直で優しい心の持ち主であることはわかりました。しかし、その老いによって認知症問題行動が重なってきたための異常行動なのです。このような場合、周囲の人間が病気を充分に理解し、協力し、ご本人とご家族にとって一番無理のない選択をすることが大切なのです。なぜなら、答えに一つの正解というものはなく、長く介護医療との関わりが続くからなのです。

現在、在宅医療制度は20年を迎えようとしています。そして、日本は長寿社会となり、高齢者の増加と核家族化が問題といわれています。

しかし、本当に問題なのは、認知症は「体は元気で認知力の低下」といったことだけではなく問題行動（暴言・暴力・介護への抵抗）を充分理解することなのです。現代は核家族化で三世代同居が著しく少なくなり、高齢者介護体感上も困難を極めています。さらに後見人各々の「クオリティ・オブ・ライフ」や「死生観」も異なります。いずれにしても「ノーマライゼーション」という視座で根気よく歩んで行かざるを得ないでしょう。

「お医者さんが来てくれる」
質の高い 在宅医療・看護・介護
を『千舟町クリニック』は目指しています。



機能強化型・有床 在宅療養支援診療所
（医）東西会 千舟町クリニック
臨床生命科学（体質・病態学・栄養学）研究所開設
松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788
http://www.touzaikai.jp/